カルディとオマール

縛守神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カルディとオマール

【Ｎコード】
Ｎ５１３８Ｖ

【作者名】
縛守神

【あらすじ】
都会で働く雑誌記者と、田舎で慎ましく暮らす楽器店員。二人を繋いだのは、コーヒーだった。

序章（前書き）

カルディ…現在のエチオピア・アビシニア高原に住む羊飼いの青年。
飼っていた羊が興奮していることに気付き、
羊たちの食べた物を辿って珈琲の実を発見した。
＜コーヒー発見のキリスト教説＞

オマール…イスラム僧侶。
現在のイエメン、アラビア半島南西端で、空腹に飢えて
いたところ
珈琲の実をついばむ鳥を発見。
＜コーヒー発見のイスラム教説＞

序章

息が苦しい。

それでも、走ることを止めるわけにはいかなかった。ジリリリリと、無慈悲に鳴り響く電子音が聞こえたとき、彼はやっと改札口を抜けた。階段を二段飛ばしで駆けあがってホームに辿り着いた時、電車は、口を閉じて沈みかかった夕陽に向かって走り出した。１７時４６分発の‘終電’だった。

「畜生。」

息も絶え絶えに呟いた言葉は、誰に届くことも無く消えていった。雑誌の取材で、街の中心部からかけ離れた地に彼は来ていた。申し訳程度にページの隅に載る、イベント宣伝のための取材だ。滅多に人の来ないこの村にとって、来月末にある豊作祭が数少ない集客のチャンスなのだろう。村の広報部から、雑誌に取り上げて欲しいと電話が来たのは三日前のことだった。ページレイアウトを担当する社員のミスで空いてしまったスペースを埋めるのに丁度いい、と編集長は彼をこの村に送り込んだ。までは、良かった。

それなりの下調べとインタビュー内容をかるくまとめて今日の朝、始発に乗って3時間かけてこの村まで来た。直線距離にしたら、そんなにかかることは無いのだろうが、何しろ山奥の村。執拗に蛇行する道と、各駅停車しか走らない路線の所為で、こんなにも時間がかかる。そこから歩いて1時間のところに、取材先があった。村役場の広報部を訪ねると、珍しい客に、手厚い歓迎がされた。ありがたかったが、それに時間を取られ過ぎた。取材が始まったのが昼過ぎ。予定では取材を終えて帰路につくはずの時間だった。焦り気味で取材をすすめる彼の気持ちと裏腹に、役所の担当者はのんびりと喋り続ける。役所を出られたのは、１７時を１５分過ぎていた。担当者は流石に悪気を感じたのか、バイクで送って行こうと提案してくれたし、彼もそれに乗ることにしたのだが、途中ですれ違ったト

ラックに乗っていたおじいさんと、バイクから降りて話し始めてしまったために、彼はそれを横目に一人走って駅に行く羽目になった。
「どうしたものかな。」
辺りは暗くなりかけている。泊まれそうなところを見回してみるも、道沿いに並ぶ小さな個人店は既にシャッターをおろしており、明かりが見えるのは民家と、小さな案内所、それから錆びれたバーくらいだった。知らない人の家に泊めてもらうほどの図々しさが彼には無かったし、案内所からは人の気配がしなかったため、仕方なくバーの扉を開いた。汗で湿ったカッターに、冷たい風が痛く刺さった。
「いらっしゃい。」
カランカランと鳴る扉に、店の中の女が反応して、済んだ声を出した。6つあるカウンター席には既に女が一人座っていて、今「いらっしゃい。」と行った女と静かに話をしていた。テーブル席も、3つほどあったが、どれも4人席で、一人で座るのには何となく居心地が悪かったため、カウンターの端に腰をおろした。
「ご注文は？」
カウンターの女が温かいお絞りとメニューを渡した。暖房の効いた店内に入ってから、収まりかけていた汗が再び出始めた。スーツを脱いで背もたれにかけながら、彼はメニューもろくに開かずに、生ビールを注文した。女はそれに微笑んで答えた。目鼻立ちのはっきりした、線の細い女で、なかなかにきれいな人だな、と思った。
「お客さん、一体なにしにこの村に来たんです？」
女がビールをカウンターに置きながら、意外そうに尋ねた。彼がこの村の住民で無いことくらい、この村に住む人には容易に分かってしまうのだろう。
「雑誌の取材で。」
ビールの泡を一口かじってから、簡潔に答えた。
「雑誌の取材？」
理解できないという風に、女は首をかしげた。簡潔に答えすぎた

か、と思い口を開きかけると、カウンターに座っていた女が
「豊作祭じゃない？村おこしになんとかつなげようと、役場の人たち毎年躍起になってるじゃない。」
と言った。その声が意外と高い声で、少し意表を突かれた気がした。
「あぁ、豊作祭ね。」と女は納得してしきりに頷いた。それから、カウンターの奥に入っていき、直ぐにお皿を片手に戻ってきた。
「豊作祭と言えば、今年は枝豆が凄くたくさんとれちゃってね。お客さん、酒のつまみにどう？」
と言ってそれをすすめた。走ってかなりのエネルギーを消耗した彼は、ありがたく頂くことにした。気付かないうちにガツガツ食べていたようだ。
「お腹すいてたのね。何か他にも持ってくるわ。」
と気遣ったのを止める間もなく、女はカウンターの奥に入って行った。
「災難ね。終電に乗り遅れたのでしょ？」
客の女が心配そうに声をかけた。
「ええ。どこか、とまれる場所しりませんか。」
ダメ元で尋ねてみる。女は少し考えてから、笑って言った。
「ここに一晩いると良いわ。店は閉まるけどスペースはあるもの。多分理央さんも納得してくれるわ。」
そう言ってから彼女は付け足した。「理央さんって、あの人よ。」とカウンターの奥を指差しながら。
「でも、仮に僕が泥棒だったらどうするんです？店の者何もかも持ち出して逃げたら？」
彼女は意表を突かれたような表情をしてから、直ぐに笑みを漏らした。
「ありえないわ。大体、どうやってこの村から出てくのよ。無理だわ。隣の駅までだって歩いて結構あるのに。」
確かに、納得できる理屈だった。でも、その小馬鹿にしたような

物言いにムッとしてつい言い返していた。
「カルディの羊なら街までだって一晩で連れてってくれますよ。」
言った後に、後悔した。ほとんどの人には伝わらない例えをしてしまった。
「何言ってるの。羊なんかこの村にはいないわ。それに、異常があったら、オマールの鳥が鳴いて教えてくれるわ。」
「くっ。」またもや言いくるめられてそんな言葉しか出てこなかった。
が、何かがおかしい。あれ？なんで会話が成立してるんだ？脳が追い付くまでに少し時間がかかった。相手にも同じ反応が起きてたらしい。不思議の正体すら分からない、モヤモヤした表情をした後に、何かに気付いた。
「相当マニアックな歴史好き？それとも熱心なキリスト教徒？」
彼女は後半部分を問う時に、とても神経質な声色になった。もしかして酷い侮辱をしたかもしれないという、罪悪感がそうさせた。
「どちらでも。」
彼は簡潔に答えてから
「そういうあなたは熱心なイスラム教徒ですか？」
と質問で返した。
「いいえ。」
彼女も簡潔に答えた。
「それじゃあ・・・」
と二人の声が重なった。女性の顔は活き活きしていたし、自分も顔がにやけるのを止めることが出来なかった。久々にコーヒー談義が出来るかもしれない。そう思った。

ハイブレンド

あの日、結局僕らは理央さんまで巻き込んで、一晩中語り合った。別れ際に、連絡先を交換して

「また今度、喫茶店にでも。」

とどちらからともなく約束をこぎ着けた。雑誌の編集が終わり、後は出版されるのを待つだけになった頃、僕は彼女にメールを送った。

「お久し振りです。忙しかった編集作業も無事終わりました。時間が取れそうなので今度お茶でもしませんか。」

味もそっけもないメールに対する返信は、やはり味もそっけもなかった。

「お疲れ様。嬉しいです。私は休日ならそちらに行けるので、君の都合のいい日でどうぞ。」

少なくとも、僕の知っているどの女子よりも、簡潔で、味の無い内容だった。その後2，3通やりとりをして、今週末会うことに決まった。

指定された駅で降りると、懐かしい気持ちよりも胸の痛みの方が強く感じられた。7年前、大学を中退して実家に帰って以来の場所だ。風景はかなり変化していたが、雰囲気はあまり変わっていない。大好きだった街。大嫌いにした街。そうでないとこの街を離れることなど出来なかった。無理やり自分を騙して、この街を罵倒して去ったのに、もう一度この場に来ることになった。躊躇いが無かったわけではない。ないけれど、ここまで自分が戸惑うとは思わなかった。

「お久し振りです。」

改札を通ると、彼が待っていた。

「久し振り。待った？」

「いいえ。僕も丁度今来たところです。」
爽やかな笑みを零す彼に若々しさを感じて、つい言葉をもらす。
「若いなぁ。」
彼が吹き出した。
「何言ってるんですか。三つしか変わらないのに。」
「人生越えた山の数が違うのよ。」
「いやいや、雑誌記者だって結構大変なんですよ。」
子供っぽく、口を尖らせたのを見て、今度は心の中だけで「若いなぁ。」と思った。
「どの喫茶店に行くの？」
「あぁ。こっちです。ブレンドに力入れてるんですよ、そこは。」
「へぇ。何て店？」
「十窯（とよう）です。十に窯で、とよう。」
「結構新しいところなのね。」
「2年前に開店しました。でも、どうしてそれを？」
「やっぱり。私が此処にいた頃には無かったもの。」
「此処にいたって？住んでたんですか？」
「2年だけね。」
「そうだったんですか。そういえば僕、あなたのこと全然知りません。」
「だろうね、喋ってないから。」
「…なんだか、この間は僕ばっかり喋ってすみませんでした。」
「構わないよ。私、喋るの苦手だから。」
「そんなこと言ってないで。今日は喋ってもらいますよ。」
そういってみせる笑顔にやはり「若いなぁ」と思わずにはいられない。

扉を開けるとカランと音が鳴り、見慣れた顔が奥から顔を出す。
「こんにちは。僕はいつものを。あと、メニューを彼女に。」
「はいよ。」

まだ３０半ばというのに額辺りの毛が後退しかかっているマスターが、眼鏡の奥から彼女を除きながらメニューを差し出した。
「ありがとうございます。」
メニューを受け取った彼女は真剣にメニューを眺める。親指を眉間にあてる姿は、恐らく彼女が考えるときにする癖なのだろう。そして、決めかねたように
「おすすめは？」
と尋ねた。
「愚問ですね。ブレンドに決まってますよ。」
と笑うマスターの目を、彼女はまじまじと見て
「えぇと。だから、どのブレンドが一番おすすめですか？」
と尋ねなおした。
「なるほどね。お客さん、好きな豆は何ですか？」
「最近はエルサルバドルのブルボン種ばかり飲んでるわ。」
「それならハイブレンドかな。エルサルバドルのパカマラ種がベースだけど。」
「構わない。それでお願い。」
なかなかマニアックな会話である。
「あの・・・。パカマラ種て何ですか。」
尋ねる自分を、彼女は不思議そうに見つめから、あぁ、と今言葉が彼女のもとに届いたかのように納得して口を開いた。
「人工交配種のひとつよ。コクが弱めなのが欠点だけどね、酸味はなかなかよ。」
「本当に詳しいんですね。」
驚嘆の言葉をもらすと
「偏った知識しかないけどね。」
と苦笑した。
「飲み始めると没頭しちゃうの。だから、特定の豆にしか詳しくなれない。
それに、物忘れ激しいから直ぐ忘れちゃうの。エルサルバドルは

今没頭してるから詳しいだけ。」
「それでも、そこまで拘るなんて、やっぱり凄いです。」
「バカの一つ覚えってやつね。」
と相変わらず自虐的な言葉が続く。
「それより、君はいつも何を頼んでるの？」
自然と話題を彼女のことから自分に移した。あまりにも滑らかな流れすぎて、それ以上彼女について尋ねることは出来なかった。
「僕、比較的深煎りが好きなんです。だから専らフレンチブレンドですよ。」
「そう。」
そこで会話はいったん途切れた。マスターが湯気の立ったコーヒーカップを二つ持ってきたからだ。
「はいよ。」
という低い声とともにおかれたコーヒーは香ばしい香りを放っていた。
「いただきます。」
彼女は静かにそう言ってカップに手をかけた。

一口飲んで口の中に広がったのは、爽やかな香味だけでは無かった。驚きを隠しきれずに、思わずカップを、音を立ててソーサーに戻した。
「どうしました？」
隣に座る彼が、不思議そうな顔で覗き込む。
「あの…マスター。」
それをスルーしてマスターに声をかける。マスターは片眉をあげてこちらを見た。
「榎本紘一という男性を知っていますか。」
マスターの上がっていなかった方の眉も上がって、仕舞には目が丸くなった。
「驚いた。俺は紘一の兄だよ。でも、どうしてお客さんが弟を知っ

てるんだい？」
「榎本先輩とは大学時代に知りあいました。このコーヒー、彼が昔淹れてくれたコーヒーと同じ味がしたので、もしかして、と思ったんです。」
「そうか、知り合いだったか。」
「彼、元気ですか。」
「ああ。去年やっと小学校から正規採用貰ってね。一人前に教師やってるよ。」
　随分遅い正規採用ですね、と顔をしかめるとマスターも苦笑いした。
「まぁ、教員免許自体、2度滑ったからね、あいつは。」
　そう言ってから、何か閃いたような顔をした。
「そういえば、お客さん、名前は？紘一に伝えておくよ。カワイイ後輩に会えると知ればあいつもとんでくるはずだ。」
　そして愉快そうにハハハと笑った。
「そんな、カワイイ後輩だなんて。」
　と断りながらも
「能塚雅音（のづかまさね）と言います。多分、覚えていてくれてるとは思っているんですが。」
　あわよくば感あっての、名乗りだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5138v/

カルディとオマール

2011年8月17日03時27分発行